

まればびとの國

能登立国 1300年

▼ 26

能登の地は一体、どのように語られてきたのか。土地の磁力を考える上で、歴史が作り上げたイメージの力は大きい。

「東西不隣」の半島

奈良時代、諸国を巡った高僧の名にちなむ「行基図」という地図がある。近世まで使われていたが、東西に長く描かれた日本列島で、能登は目立つ。北の海にツンと突き出しているからだ。

「能登は、日本の北の果てと思われてきた。能登の人が政府に送った書類に『東西不隣』という表現があります。『隣』がないという意味です」

加能地域史研究会代表委員の木越祐馨さん(62) 輪島市門前

第3章 歴史と人と ②

町剣地Ⅱが語る。それでも、「孤立した場所」ではなかった。木越さんは平安末期に成立した「今昔物語集」にある「鬼寝屋島」という能登の説話を挙げた。

いわく、能登沖には、河原に転がる石のように、アワビがたくさん採れる鬼寝屋島という島がある。漁師が税として納めていたが、ある時、欲を出した役人がもっと納めるよう強要したので漁師は去ってしまったという話だ。

七ツ島と海女をうかがわせる記述だが、木越さんは、物語が

指し示す地理に注目する。鬼寝屋島から高麗(朝鮮半島)まで「追い風で1日と1晩かけて行き着く」ほどの距離と示されているのである。

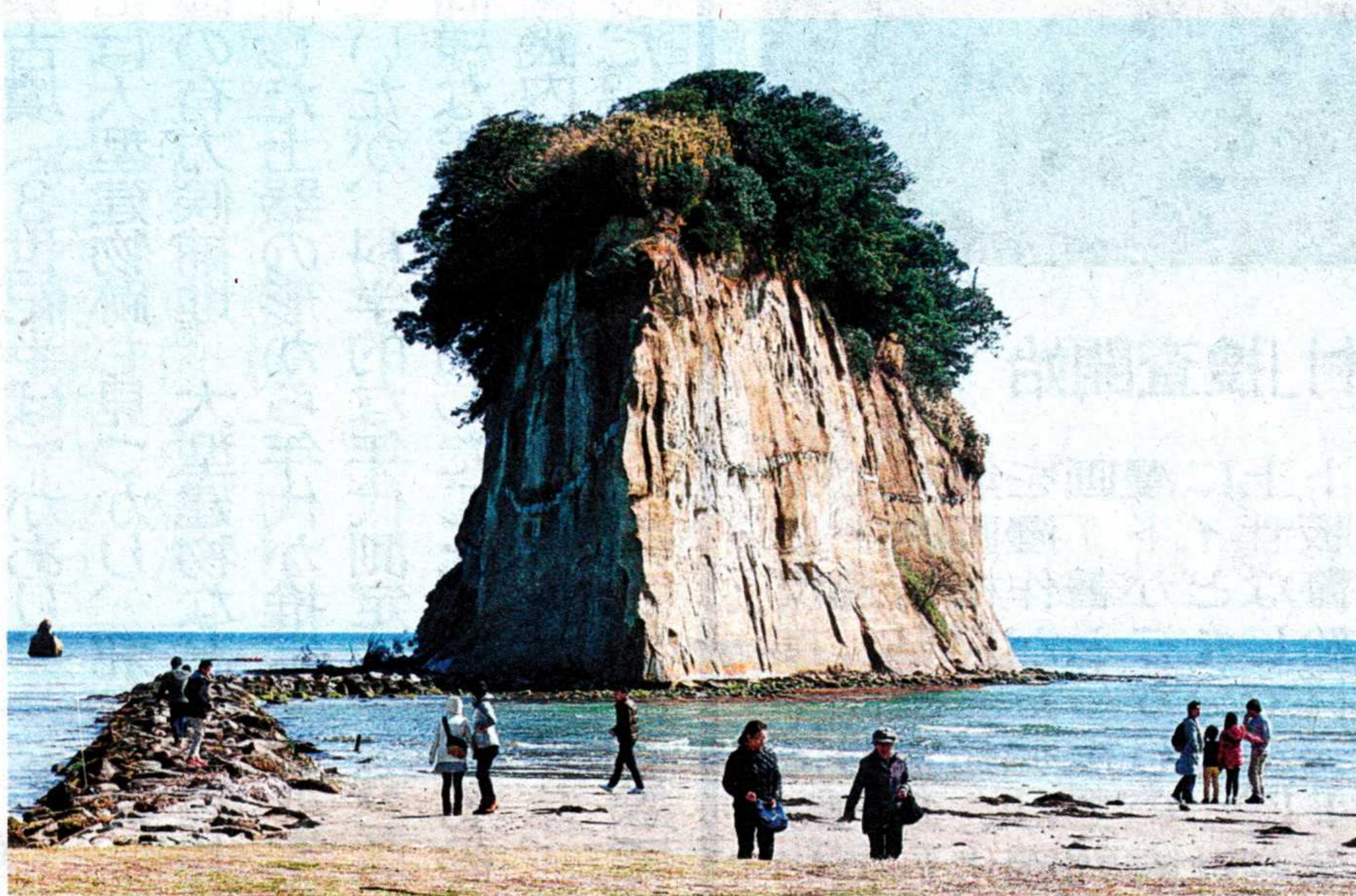
「鬼寝屋島という名前を考えたも、能登は異国に近い場所と思われていた可能性がある。漂着物存在から、人々は能登の海に向こうに自分たちの知らない異国があるという認識があったはず。異世界の入り口として認識されてきたのでしよう」と木越さんは読み解く。

「月の半島」

別の意味でも、能登は「異世界の入り口」と考えられてきた。仏教の世界である。

西山さんによると珠洲市の見附島は明け方の月を望む名所だったという

珠洲市宝立町



中世の歌人「浄土を見た」

15世紀後半、七尾湾を訪れた歌人が、月明かりに照らされた小島にある古刹の灯を見て「補陀落のはじめはこれか」と感嘆する和歌を残している。

民俗学研究者、西山郷史さん(71) 珠洲市飯田町Ⅱは「補陀落とは、海に向こうにある浄土のことです。浄土と同じような月があると驚いている」と指摘する。

西山さんによれば、能登は「月の半島」として声価を積み重ねてきた。能登には、視界を遮る高い山がなく、三方を海に囲まれている。月を愛でるのに適した場所だ。珠洲の見附島も、明け方の月の名所だったという。

「分け隔てなく平等に人を照らす月は、仏の大慈悲の象徴。能登を訪れた人は、見たことのない月の美しさから、仏教の教えを実感した」と西山さんは話す。

太古から蓄積されたイメージが、能登に「まればびと」を呼ぶ力となっている。(取材班)

異世界の入り口だった